イベントスケジュール（言語表現学会）

本年度の『言語表現研究』は、現在、予定通りに発行準備中です。お楽しみに！

研究発表会通信

第２号
２０１２年１１月９日
発行
兵庫教育大学　言語表現学会
研究発表会担当

研究発表会特集

台風に祟られ初めての延期…

国語一本、英語三本、合わせて四本の発表で、成功裡に終了！

運に期待…ところが、「逸れろ！」と念じた台風は、近畿地方へと進路を向けた。二週間の順延、さらには特別講演が開催できないという異例の状態に陥ったが、発表者をはじめとした多くの方々の熱意の中で、第二回研究発表会が開催された。気象への対応等、多くの課題は残されているが、成功裡に終了したことを喜びたい。また来年度！

前回の通信の書き出しは、こうだった。

「警報が出ていても、学会は開催するのか！？」

少なくとも前夜の天候は、そんな不安を掻き立てるに充分だった。大雨洪水警報に雷・竜巻の注意報。しかし、一夜明ければ総てが杞憂…。

そう幸運は続かなかった…。第一回が十六本、第二回が四本という発表数。発表者が少なかった分、吹き飛ばす力が少なかった？　いやいや、そんなことはない。いかに精鋭が念じようと、来るものは来るのだ。（笑）　それを痛いほど思い知らされた今回の開催とであった。

◇　◇　◇　◇

急遽、会長を含めた編集委員が集まり、対応を考えた。台風接近のニュースが刻々と伝えられる前夜のことであった。出した結論は、「大学の休講措置と同等の対応で臨む」である。学会としての基準を作っておくことの必要性は痛感したが、悔やんでも遅い。運営委員への連絡、特別講演の本名先生への連絡、ホームページ上での告知、そして会場への掲示物の準備と慌ただしい時間が過ぎて行った。今までが幸運だったことによる油断とも言えない、まさに「前代未聞」の状況下での対応となった。

今後、内規か細則で、触れておかねばならない課題であろう。

以下、記録係として写真撮影等に当たって下さった鬼束さんからいただいた感想を掲げておく。

◇　◇　◇　◇　◇

第二回研究大会は、英語と国語の発表が同会場であったので、自分の専門でない分野の発表を聞くことができました。前回は自分の専門の研究分野に注目していたので、今回は幅広い視野での思考が要求され、より知識欲が刺激され

1	12:15～12:50	成沢　羽央	‘Emotional Should’のモダリティ
2	12:55～13:30	浅木森俊貴	ナラティブ・タスクとロールプレイ・タスクにおける英語学習者の創造性とパフォーマンスの相関性
3	13:35～14:10	沖田真理子	絵本を媒介とした「読み合い」活動における言語の学び
4	14:15～14:50	橋間　由季	説明的文章教材における非連続型テキストと本文の関連性

成沢羽央さんの発表「Emotional Should のモダリティ」では、should の持つ意味や用法などを明確にすることで、話者の感情をより細かく判断できることが分かりました。それは、言語を学ぶ私たちにとって重要なことです。一語一語の大切さを再認識しました。今回の発表で、対人関係に与える影響を相関図を示してプレゼンで分かりやすい説明でした。また、漱石の『こころ』の英訳の例は、予想に反する事実の意外性を表すことについて詳細で理解しやすかったです。

浅木森俊貴さんの発表「ナラティブ・タスクとロールプレイにおける英語学習の創造性とパフォーマンスの相関性」は、大学生を対象にした調査結果が詳細に数値化されており、客観的に認識しやすかったです。ただ、浅木森さんの発表は数字がたくさん出てきている時点で、国語科の私には、これ以上のコメントができません。（謝）

沖田真理子さんの発表「絵本を媒介とした『読み合い』活動における言語の学び」は、絵本を媒介とした「読み合い」活動における言語の学びについて、絵本を「読み聞かせ」するのではなく、「読み合い」活動をすることによって物語を楽しみ、児童にとって想像を広げたりコミュニケーションを図ったりと豊かな深まりがあることが分かりました。それは、日本語の絵本だけでなく、知らない言葉である英語で書かれている絵本でも同様だということが、実践例より明確にされていました。実践例の英語で読む児童の映像から、その読み方にも感情が自然とこめられていることなども質疑応答では話題になりました。

橋間由希さんの発表「説明的文章教材における非連続型テキストと本文の関連性」は、非連続型テキストと本文の関連を実例を示しながら説明してくれたので理解しやすかったです。先の英語の発表者のプレゼンとは違い、紙面発表でした。聴衆は資料を説明に合わせてめくっていき、そのめくる音は合わせたかのように会場に響いていました。質疑・応答では、教員の側から多くの質問や意見がありました。時には、身振り手振りを交えながら、発表者は一生懸命に答えていました。

今回の司会は、山河萌さんと辻道真理子さん。二人とも手慣れた様子で、淀みなく司会を務められました。

受付は廣岡正晃さんと山田小百合さん、機器の係は岡田華奈さん、そして記録係は鬼束佳苗でした。

定刻通りに無事終了。皆さん、お疲れ様！

データのバックアップを激しく推奨！

着任した当時、兵庫教育大学は「実に良く停電する大学」であった。契約容量を少なめにした結果と後で聞いたが、笑えるようで笑えない話も何度か聞いた。夜の突然の停電…学生寮から悲鳴が上がる。一つは院生の「修論が消えた！」の悲鳴、もう一つは学部生の「ゲームのデータが消えた！」という悲鳴だったというが、あくまでも伝聞の域は越えない。（笑）　ただし、昼夜を隔てず突然として起こる停電には往生し、論文等のデータは頻繁にバックアップするという習慣はついた。それがである…。

言語表現学会の事務局が入っている兵庫教育大学の教育言語社会棟は、現在、大規模な改修工事の最中である。研究棟とは名ばかりで、既に工事現場と化していて、仕事をする場所どころか足の踏み場すらない。

ある土曜日のことである…。研究室で一仕事してから大阪へ所用で出かけ、帰って研究室の机上を見て愕然とした。むき出しのPCやHD、プリンタの目の前で石膏ボードの切断をするか！？　化石のようになっている機器の前で立ち尽くすのみ…暴挙である。

二台のPCのうち二台は、既に起動せず。やっと起動した一台もセーフモードで立ち上がり、そして「OSとしてWindows7を使用するか？」と聞いてきた。「他に何かある！？」という突っ込みを入れる余裕さえない人間に…である。認識しないHDを掃除して接続を繰り返すと、認識した。表示に言う…「使うなら、フォーマットせよ」　合わせて6テラだぞ、そのデータを返せ！　瀕死の状態で立ち上がったPCのアプリケーションのデータ表示欄は真っ白、総て飛んで消えている。ついでに、セキュリティソフトは「危険」のアラート…。御親切に、「ファイルがなくなっているから修復も不能」と教えてくれた。（泣）　基本ソフトを使って資料を打ち出そうとすると、プリンタが紙詰まり。抜き出すと「金魚すくい」を思い出す「砂漠の中での砂すくい」状態…。完全に疲弊し、消耗して体調を崩した。

PCを使っておられる方へ…データのバックアップを激しく推奨！　編集子のように、バックアップしているHDまで即死するという状況は稀である。少なくとも本体に蓄積せず、HD等も含めて「外部に出して蓄積する」という習慣を、必ずつけておくよう…激しく推奨！　PC等のハードは返ってくるとしても、それで済まないのが我々。そして、「身の安全と健康を守る」ことも…激しく推奨。損なわれて、戻ってくるモノではない。

編集後記

約一ヶ月遅れでの通信となった。総て編集に当たった小竹の諸事情によるものである。詳細は左記の通りである…。とにかく参っている。四十数年間の研究業績、そして論文のファイル（合計２テラ）は、復元することさえ叶わなかった。

たかが論文である。しかし、その記された文字の数ではなく、それにまつわる思いや過程を記憶という形でしか残せなかったのが悔しい。くれぐれも…御用心と呟くのが精一杯。

知人と話していたら、「こっそり復元なんかされてばらまかれたりしたら…」と言われた。合計６テラを復元する財力はないが、「昔のものは、特に返して欲しい」と負け惜しみのように言葉を返した。論文たちにはすまないが…若気の至りのようなーくだりは、何としても取り返しておきたかった。（笑）　思い出とともに…。（雪）